

思考力・判断力・ 表現力を培う

愛知教育大学
生活科教育講座 教授
野田 敦敬 氏



教育随想

本誌の巻頭に執筆させていただけることを大変光栄に思います。連尺小学校、六ツ美西部小学校、豊富小学校には、毎年校内授業研究会に呼んでいただき、いつもよく練られている授業を拝見し、勉強させていただいております。また、市の生活科部会でも毎年八月初めの基礎研修講座で、お話をさせていただき、自分の考えをまとめるよい機会を与えていただいております。

いよいよ今年は、学習指導要領が改訂告示されます。これほど、国民の教育への関心が高まった中で改訂はかつてなかったと思います。これは、マスコミ報道が大きく影響をしていると思います。ただ、その報道内容は必ずしも正しいとは言えない部分も多いと思います。それらに惑わされることなく、真に子供に培うべき力は何でしょうか。



私は、思考力・判断力・表現力そして学習意欲だと思っています。特に、思考力・判断力・表現力は、基礎的・基本的な知識・技能の上に立って育てられるものでしょう。したがって、それらの知識・技能をより実社会や実生活に近い場面で活用する学習に時間をかけることで、思考力・判断力・表現力は育ち、活用することで知識・技能もより強化されると考えます。

また、岡崎の教育の特色でもあります。

子供が相互にかかわり合う学習、例えば、友達に自分の考えを分かってもらおうとする場面、どちらの方向に進むべきかをみんなで考える場面などにおいてこそ、思考力・判断力・表現力は培われると思います。ぜひ、どのような活用する学習を仕組み、どのように子供たちをかわらせるかの研究をさらに深めていただくことを期待しています。

(のだから)



平成20年1月1日

1月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	■
愛知教育大学教授 野田 敦敬氏	
この人に聞く	■
愛知災害救助大協会代表 ベレゾフスキー・トーマス氏	
羅針盤	■
音楽科指導員	寺島 真澄
ふれあい	■
大樹寺小	酒井 智之
矢作 幼	大羽八重子
特集	■
岡崎で学ぶ 外国から来た子どもたち	
お知らせ	■
フォト・ヒストリー	■
大型遊具の設置と活用 (平成6年)	
この本を	■

ふるさとシリーズ

この人に聞く



もっと知ってほしい、
災害救助犬の存在を

愛知災害救助犬協会 代表
ベレソフスキー・トーマス氏

一九九五年一月に起きた阪神大震災。ポーランド人トーマス氏は、岡崎の自宅で日本人の夫人とともにテレビから映し出される悲惨な情景に目を覆った。

「倒壊した家屋の前で、お年寄りが泣きながら、『昨日ここで声が聞こえたのに、今日は聞こえない』と叫んでいるのを聞き、胸が痛くなりました。あとで分かったことですが、スイスのジュネーブでは、いち早く災害救助犬を日本へ送ろうとしましたが、日本政府は当初、海外からの助けを必要としなかったようです。」

三日後、ようやく災害救助犬が入

ることになった。しかし、すでに手遅れに近かった。

「私は阪神大震災を通して、自分の飼った犬を救助犬に育てようと決意しました。ちょうど、震災後に米国連邦レスキュー協会から初めて訓練士が来日すると聞き、妻の反対を押し切つて会いに行きました。」

訓練士の話に共感し、本格的な資格を取得するために、チューイ、ガミーという二頭の犬とともに渡米して訓練を受け、災害救助犬に育て上げた。トーマス氏も同協会が発行する資格を取得した。そして一九九七年四月、愛知災害救助犬協会を立ち上げたのである。

「一九九九年九月の台湾地震では、この二頭を引き連れて現地に入りました。睡眠時間は三日間で三時間。がれきりの中を二頭の犬とともに歩き回り、多数の生存者を発見しました。」
災害現場では、冷静な判断力も要求される。

「災害救助犬育成といっても、犬を



扱う人の教育の方がはるかに時間がかかり、難しいのです。気象学・地理学・建築学のほか、災害にかかわる詳しい知識を学んだり、体力を強化したりと盛りだくさんです。そのおかげで、台湾地震でも、落ち着いて行動することができました。」

トーマス氏は続ける。

「訓練の過酷さに途中で投げ出してしまふ人も多いですね。また、訓練費・設備費に加え、現地で使う四駆の車、指導者を育成するための資金もかかります。欧米各国では、ボランティアやチャリティイヤーが、ごく当たり前の行動として認められているから、国からのサポートもあるんです。」

困っている人がいたら助け合うのが、人として自然の姿だとトーマス氏は言う。

「今、県内で訓練を受けている犬は五頭、資格を取ろうとしている人が十二、三人というところです。いずれ起こると言われている大震災のことを考えると、犬も人もあまりにも少なすぎます。十年前からは、市の総合防災訓練に参加したり、学校に訪問したりしています。多くの人にその必要性を理解してもらいたいですからね。」

災害救助犬を普及させるために、トーマス氏の取り組みは今後も続く。

氏名 ベレソフスキー・トーマス
生年月日 昭和二十七年十二月一日
住所 岡崎市若松東一丁四十八

音楽の授業「不易と流行」

音楽科指導員 寺島 真澄

「指導してくださった先生のため
に今日は、精いっぱい歌います。」

過日、市内中学校の合唱コンク
ールを拝見した私の胸は、高鳴った。

「歌声の響く学校は崩壊しない……」
よく聞く言葉だが、その原動力は、
音楽の先生の力量に限らず、生徒と
共に熱く燃える学級担任の先生、学
年担当の先生の力に頼るところが大
きい。

合唱指導の授業作りにおいて、ピ
アノを弾いたり、CD音源を活用し
たりして、各学校の音楽の先生は
日々、授業を工夫、展開している。
また、こうした不易のスタイルに甘
んじているばかりでなく、各自、得
意な分野の能力を生かしながら、授
業をさらに工夫・改善している。

A先生の実践を紹介する。



心のバトン

大樹寺小 酒井 智之

運動会。学級の応援を背に、学級選抜リレーの選手がスタートラインに立つ。「One for all, All for one」クラスの合言葉を胸に、毎日授業後に集まって、自己記録の更新を目標に励まし合いながら練習を続けた。そして、A男は常にリレーメンバーの輪の中心にいた。

スタートの合図。メンバーが、心でバトンをつないでいく。そして、いよいよアンカーのA男へ。しかし、バトンパスの瞬間に他のクラスと交錯し、バトンは無情にも地面に落ちた。A男の表情が一気に曇る。応援席も、言葉を失った。A男は最後まで力走した。結果は三位。泣きながら、クラスの応援席に戻って来たA男に対し、クラス全員からこれまでに聞いたことのないような拍手の雨が降り注いだ。みんな、A男がどんな気持ちでこ



のリレーを迎えたのか、どんな気持ちで最後まで走り切ったのか分かっていった。

「クラスのみんなが心から応援したくなるような走りを見せてほしい。」走り出す前に私が言った言葉どおりの走りを見せてくれたこと、その気持ちをしっかりと受け止めたことに私は涙をこらえきれなかった。私は、こんな子供たちに出会えて幸せだ。



「ぼく、とべたよ」

矢作幼 大羽八重子

秋の運動会を目指して、子供たちがいつでも挑戦できるように四月から跳び箱を出した。

室内での遊びが好きなA男は、身体を動かして遊ぶことや新しい活動には消極的であった。跳び箱にも何度か誘いかけたが、関心を示さなかった。

ある日、A男の大好きなB男が、跳び箱の六段を跳ぶことができた。その姿に刺激されたA男は、自分か



ら、「とびばこやる」と意欲を見せた。その日からB男と二人で、「とびばこやってみます」と張り切って取り組むようになった。しかし、なかなかタイミングがつかめない。「お尻が上がってきたね。もう少し手を前につくといよいよ」と頑張りを十分認めたり、励ましたり、必要に応じて援助もした。

A男が跳んでいる様子を見守っているときのことだった。突然、四段を跳ぶ姿が目に入った。今までの頑張りを覚えてきただけに、思わずA男を抱きしめた。「ぼく、とべたよ」と言うA男の言葉を聞きながら、胸が熱くなった。「よく頑張ったね」と声をかけると、満面の笑顔を見せて、再び跳び箱へと向かった。

そして、運動会当日、自信たっぷりに五段を跳ぶA男の姿に感動し、心から拍手を送った。

先生は、生徒に音程を把握させるために「FLICAサウンドシステム」を活用している。これは、一昨年度の全日本音楽教育研究会において、作曲家・富田勲先生が岡崎に紹介されたもので、「音楽の内容をコンピュータが分析し、方向性の異なる音を六つのスピーカーから同時に鳴らすため、部屋の中央では多重的に音楽鑑賞が楽しめる」という装置である。

A先生は、多機能なシステムの中から、パート別の音を複数のスピーカーから同時に鳴らし、練習を効果的に進められる機能に着目した。

授業では、音楽室の四隅に配置したスピーカー周辺に、パート別に生徒を集め、自分の音程を聞き取らせながら練習を進める。他のパートの音も同時に聴取できるので、即座に合唱が組み立てられる。つまり、瞬時にして生徒の和声感覚を高めることができるのである。

ペアを組み、生徒相互が歌唱を聞き合ひながら、音取りを練習する生徒。この日、従来の授業方法では味わえない充足感を、生徒たちは感じ取ることができた。不易と流行が融合した、生徒の目の輝く授業であった。



▲ 日本語教室の授業の様子（城南小）

現在、岡崎市には約一万二千人の外国人が在住している。そして、市内の小中学校には、今年度五月現在、四百人を超える外国籍児童生徒が在籍する。

日本語指導を必要とする児童生徒が多く在籍する学校では、日本語教室を設置し、日本語指導を行っている。そこでは、日本語担当教員が岡崎市独自の教材をはじめとし、様々な教材を使って指導している。また、ポルトガル語、中国語、フィリピン語に対応する四人の語学相談員が市内十八の拠点校を巡回し、日本語指導や生活適応相談、必要に応じた通訳、翻訳、母国語の指導にあたっている。さらに、文部科学省の帰国・外国人児童生徒受入促進事業を受けて、二人のアラジール相談員も通訳、翻訳、教育相談などを行っている。

学校現場以外においても、外国人との共生・交流・協働を目指して、平成十六年、「OICC（岡崎市外国人交流支援センター）」が開設された。外国人市民を対象として、多言語情報の発信や生活相談などを行っている。開設以来、生活相談や日本語教室には、多くの外国人が訪れている。

こうした支援のもと、外国から来た多くの人たちが、言葉や習慣の違いを乗り越えながら日本語や日本の文化について学んでいる。

しかし、学校現場では、日本語教室を行う余裕教室や、個別指導に対応できる指導者はまだ十分とはいえない。OICCにおいても、語学指導や生活相談に対応できる所員が不足している状況にある。

国際化が進む中、外国から来た人たちが、十分な日本語指導や生活相談などを受けることができるよう、条件整備が推し進められている。

日本語教室フィリピン語講師

神谷 ジョセリンさん

日本語学習のお手伝いをさせていただいて二年になります。子供たちが、日本の文化や言葉などを分らないなりに一生懸命覚えようとする姿を見ると、私も頑張ろうという気持ちになります。これからも、フィリピンの子供たちが、日本での生活や学習に溶け込めるよう、早手・早足で応援していきたいと思えます。



日本語教室ポルトガル語講師

前田 ソランジェさん

日本語教室は、外国籍の子供たちにとって、心のゆとりの場でもあります。友達と一緒に勉強したり、母国語で話したりでき、安心して一つ一つのことを学ぶことができます。

これからも、子供たちの将来のために、日本での生活をよりよく送れるようサポートしていきたいです。



岡崎市外国人交流支援センターの活動



▲ ブラジル教室（南米出身者のための日本語教室）

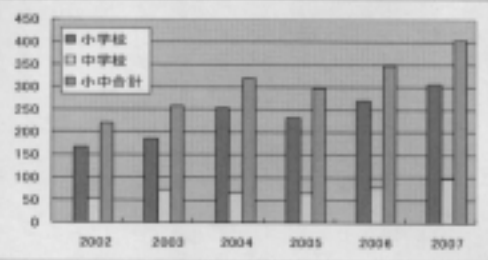


▲ グローバルセミナー
（留学生などによる各国の紹介セミナー）

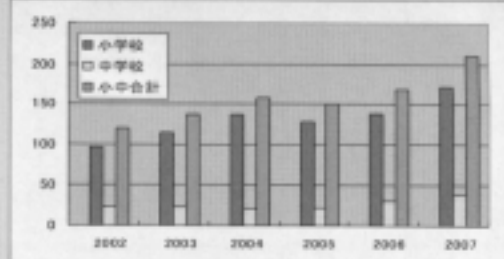


▲ ハロウィンパーティ（ボランティアのサポート）

◎市内外国籍児童生徒数（人）（5月1日現在）



◎日本語指導の必要な児童生徒数（人）（5月1日現在）



**日本語ワーク
（参考教材）**

日本語教室の学習の様子



▲ 朱 遠善先生の日本語教室（小豆坂小）



▲ 担当教師による日本語教室（上地小）



▲ 工藤知彦子先生の日本語教室（三島小）

とても楽しみな時間です。

楽しみな日本語教室

東海中一年 ブラジル人生徒

私は小学校四年のときに、ブラジルから来ました。初めは、日本語が全く分かりませんでした。だから、小学校のときも今も、日本語教室で言葉の勉強をしています。日本語は、いろいろな読み方があったり、意味があったりするので、とても難しいです。でも、先生が一人ずつ、とても丁寧に教えてくれるので、とても楽しみな時間です。

日本語教室で学んで

ワークを使った日本語教室

城南小四年 ブラジル人児童

私は日本語教室で、ひらがなやカタカナ、漢字の勉強を、日本語ワークを使って勉強しています。日本語ワークにはたくさんのお絵があるので、絵を見て日本語の言葉を書く練習が好きです。そのおかげで、あいさつや、日本のことも少し分かりました。また、算数の計算練習もワークで勉強しています。これからも、日本語をたくさん覚えたいです。

お知らせ



●教育最新情報

○岡崎市「いのちの教育」

アクションプラン

九月に、岡崎市「いのちの教育」アクションプラン推進協議会の五つの部会から提言が発表された。この提言を受けて、市内の幼稚園・保育園・小中学校では様々な計画・実践がなされている。

(1)取組の概要

児童生徒が主体となった活動では小学校の新規活動が二十七件、中学校の新規活動が二十一件である。また、健全育成にかかわる活動では、小学校の新規活動が二十件、中学校では十六件である。

全体的には次のような傾向が見られる。

(小学校)

・高齢者との交流を通し、思

いやりの心を育てようとしている学校が多い。

・地域パトロールを充実させようとしている学校が増えている。

(中学校)

・いじめの撲滅や人権を意識した集会を計画している学校が増えている。

・いのちをテーマとした講演会を開催する学校が多い。

・夜間パトロールを実施する学校が増えている。

(具体的な活動)

「親から子に伝えたい一百」や「子供から家族への手紙」など、親子の絆や命・思いやりの心をテーマにした標語をつくった。そして、リーフレットにして全学区へ配布し、地域を挙げての啓発活動を行った。

(山中小学校)

生徒会役員を中心に「いじ

めを撲滅しよう集会」を開催し、全校生徒に呼びかけた。

各学級では呼びかけを受けて、いじめをなくす方策についてグループエンカウンターを行い、級長が学級の意見を全校に発表した。(英中学校)

(2)「いのちの教育」強化週間
人権週間である十二月四日から十日までを、岡崎市「いのちの教育」強化週間とし、すべての小中学校で「いのち

や「いじめ」をテーマにした道徳や特別活動の授業が実践されたり、講演会、映画等鑑賞会が催されたりした。これをきっかけに、子供たちは改めて自分を振り返った。

(講演会)

宇野政博 (人権博覧委員)
近藤真庸 (岐阜大学教授)
栗本宏美 (明日の風文芸賞岡崎代表)

久野未耶子 (インターナショナルボランティアグループ理事長)
タイアグループ理事

まのあけみ (シンガソングライター)
弓立まり (シンガソングライター)

業師寺道代 (愛知みずほ大学大学院 特任教授) など

(映画等鑑賞会)
「ラブレター」

「私たちの人権宣言 転校生はおばあちゃん！」
「神の子たち」
「リットルの涙」
「ハッピーバースデー」
「とべないホテル」 など

(授業)

十一月に、いのちの教育推進委員会が、中学校道徳・特別活動のモデル授業案を示した。道徳(心やさしさプラン)では、「生命への安心感・命を守る正義感・生命への誇り」を、目指す価値観としている。また、特別活動(行いかがやきプラン)では、「いじめに自ら立ち向かう態度・いじめを積極的になくそうとする態度・携帯電話を正しく使う態度」を形成することを目指している。

中学校では、この授業案をもとにすべての学級で「いのちの教育」の授業が展開された。

北中学校では「いじめにあつたら」をテーマに特別活動の授業が行われた。ロールプレイをとおして、いじめにあつている自分を感じながら、その対処について真剣に考えた。また、城北中学校では「へその緒」を題材に道徳の授業が行われた。学級の子供のへその緒を実際に提示しながら、命の尊さを考える授業であった。

来年度は、小学校においてもモデル授業案が示される予定である。さらに充実したものであることが期待される。



▲道徳授業「へその緒」(城北中・廣瀬教諭)

●表 彰

- 第十三回日本管楽合奏コンテスト
最優秀賞 岩津中
指揮者賞 同
岩津中教諭 織部 一良
優秀賞 竜海中
ヤマハ賞 竜海中
- 第四十一回全国中学校文芸作品・歌曲制作コンクール
文芸の部「作文」部門
文英堂社長賞
甲山中三年 小嶋 絢水
- 第四回全国こども作品コンクール 俳句中学生の部
惺然大賞
矢作北中三年 沢田 耕希
- 楽しい子育て全国キャンペーン 家族の風景
文部科学大臣賞
甲山中教諭 丹羽 郁人
- CBCこども音楽コンクール 中部決勝大会（※全国大会出場）
重奏の部
中学校最優秀賞 城北中寮
小学校最優秀賞 千万町小
合奏第一の部
最優秀賞 城北中寮
- 管楽合奏の部
中学校最優秀賞 岩津中寮
小学校最優秀賞 竜美丘小寮
- 合唱の部
中学校優秀賞 竜海中
小学校優秀賞 根石小
同 矢作東小
同 矢作南小
◆東海地区小学校バンドフェスティバル
金賞 竜美丘小
- ◆第五十六回愛知県中学校駅伝大会
男子 第四位 甲山中
第七位 矢作中
第八位 美川中
女子 第四位 竜海中
- ◆第二十一回愛知県小学校陸上競技選手権大会
走り幅跳び
優勝 男川小五年 近藤 雅哉
女子混成二種 第四位 常磐南小六年 宇野 夏生
- ◆愛知県中学校カヌー大会新人戦
男子優勝 新香山中
女子優勝 新香山中
総合優勝 新香山中
- ◆第二十六回愛知県中学生バレーボール新人大会
男子 優勝 矢作中
第二位 北中
第三位 矢作北中

女子 第二位 矢作北中

- ◆愛知県中学校ソフトテニス新人大会
団体 第二位 河合中
- ◆愛知県中学生英語弁論大会 最優秀賞
竜海中二年 柴田小俊乃
- ◆第三回「明日の風文芸賞」
明日の風大賞 甲山中三年 清水 有紗
愛知県知事賞 甲山中三年 小嶋 絢水
甲山中三年 石川 拓人
大河河小六年 櫻井 高祐
- ◆第五十七回読売新聞社主催全国小中学校作文コンクール 優秀賞
美川中 松澤 仁志

●第三十五回教育文化賞

岡崎の教育文化振興に寄与する個人または、団体の優れた業績や、研究・活動に対して顕彰・助成を行う「教育文化賞」授与式が行われた。

本年度推薦された個人・団体は総計四十件であった。

○個人の部

○河澄正春 氏
「ササユリが咲き、小鳥が集う里山にしよう」という子供たちの願いを物心両面で支援した。氏の指導した里山再生活動は、子供たちに地域を愛する心を体験的に培い、秦梨小学校を全国学校緑化コンクール特選に導いた。

○加藤源重 氏
自助具の開発に取り組み、平成十二年にボランティア組織「福祉工房あいち」を設立した。

以来、数々の自助具を開発し、科学技術庁官賞を受賞する。また、氏の生き方が反響を呼び各所で講演活動を行い、人々に深い感銘を与えている。

○森 千香 氏
昭和五十四年に自主グループ「てんとう虫文庫」を発足させた。絵本の読み聞かせを中心に、貸し出しをしたり、本をもとにした遊びを指導したりしている。また、障害のある子供たちへの読み聞かせも実践している。

○団体の部

○岡崎市立甲山中学校 生徒会
昭和三十九年以来、四十三年間にわたって米山寮への訪問を続け、子供同士がふれあっ

て一緒に活動している。また、平成七年からはアルミ缶回収を通して新米山寮建設資金や東海骨髄バンク基金として寄附している。

○岡崎市立竜海中学校 吹奏楽部
十年間で東海大会に九度出場するなど、積極的な取り組みと地道な努力により顕著な実績を取っている。平成十六年度には全国大会銀賞も受賞した。また、市民に向けてコンサートを開いたり、身体障害者施設などへの訪問演奏を行ったりしている。

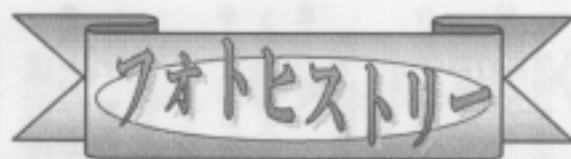


大型遊具の設置と活用 (平成6年)

写真提供：北野小学校

創立十周年記念として設置された大型の遊具「わくわくランド」である。ひとケラスの子供たちが一度に遊ぶことができる。繰り返し挑戦する中で、順番待ちのルールを覚えたり、様々な遊び方を考え出したり、互いに助け合う社会性を身につけたりする子供が増え、多くの教育効果が見られた。

近年、遊具による事故が多発し、老朽化や構造上の欠陥により撤去されるものが増えている。一方で、維持管理を確実に、安全な使い方を指導して有効に活用される遊具も市内には数多く存在している。遊具は子供たちの成長に欠かせないものとなっている。



岡崎の教育



- * 東京大学応援部物語 最相葉月 集英社 ¥1,575
 - * 「学び」を問いつづけて 佐伯 胖 一授業改革の原点一 小学館 ¥2,100
 - * ホテル・ニューハンプシャー 上 ジョン・アーヴィング 新潮文庫 ¥740
 - * 悩むチカラ 伊藤友宣 ほんとうのプラス思考 PHP新書 ¥720
 - * 米原万里の「愛の法則」 米原万里 集英社新書 ¥683
本書は、露語同時通訳者である著者の4つの講演録集。彼女は第1の講演で、「女が本道、男はサンプル」と愛の法則を説く。第2では国際化、第3では同時通訳の限界を述べる。最後は、通訳と翻訳の違いに触れる。その中で興味深かったのが、著者の体験。ソヴィエトの学校の図書館では、係に本を返す際、その本を要約することを要求される。これを著者は、攻撃的で立体的な読書法と名づける。この読書法は、国語教育の参考になる。
- 矢作南小 市川 修

お正月の風物詩の一つとなって久しい箱根駅伝。一本のたすきに込められた思いが、ランナーだけでなく、見る者をも熱くさせる。

まもなく、第五十九回市民駅伝。市内各所で、箱根のランナーに負けない熱い走りが見られるだろう。寒風を切り裂いて、ただひたすら走ってほしい。一本のたすきに思いを込めて。

新年を迎えた楽しみの一つに、お正月のおせち料理がある。

昆布は「よろこぶ」、豆は「まめに生きる」、蓮根は「先が見通せるように計画性をもつ」と、自分の生活に重ねながら、いたぐく。教育は、共育である。今年も、子供とともに成長していきたい。

オ ア シ ス

安堵の胸をなでおろすのは、自分の名前までまがえずに書けたときである。書き初めに真剣なまなざしで取り組む子供たち。冬休みに何十時間も練習し、一枚の書き初め用紙に気持ちを集中する。納得した字を書けた子供の表情は、本当に晴れ晴れとして輝いている。

「住めば都」。言葉や風習が違っても、その国の文化や人々に慣れ親しむことで、もう一つの故郷となる。外国から来た子供たちは、日本語や日本の文化を熱心に学んでいる。私たちが異文化を理解し、様々な場で互いの心の交流が図られるとき、岡崎が真の都となるにちがいない。

